

目で見た物事は
すべて結果である

ビジネスの世界は、常に改革・改善が要求される。でなければライバル企業に簡単に追い越されるからだ。コンピュータと機械化が進化した現在では、大手企業が推進している飽くなき効率化から、新しいビジネスモデルの創造まで、会社員は単なる労働者ではなく、クリエイティブなナレッジワーカーであることを要求されている。

だからこそ、いわゆる「気づき」が要求されるようになってきたのだが、その一方で日常的な仕事に忙殺されて、大事な問題やヒントを見落とすことは珍しくない。いや、それ以前に、深く考える習慣を持たない社会人すら少なくないのがある。

この思考力を鍛えるために「自分の目で見た物事は、すべて結果と思え」と指導しています」と専修大学文学部人文



文学部 教授
大矢根 淳

学生たちが参加している。

韓国ホナム大学やアメリカのオレゴン大学での日本語教育実習をカリキュラムに取り入れるなど、先進的なフィールドワークも珍しくない。さらに、2006年1月に東京都北区の「北とびあ」で公演されたオペラ「八犬伝」の台本まで手がけたというから驚く。

「オペラの台本は、依頼があったので、学生と一緒にやらせたいという条件で引き受けました。そのポスターから記録アーカイブまで学生や院生が制作しています」（板坂則子教授）

活動だけでなく、教養の内容も文学部の枠をはるかに超えている。「日本文学文化を学ぶだけでなく、これからは発信が必要」として、媒体の活用からインターネットも研究対象。このためメディア研究やIT講習会などを実施しているほか、日本語学では大量のコーパス（言語資料）を用いたデータ処理法も学ぶという。

単に勉強するだけでなく、ゲームや創作、映像アーカイブといった実践的な制作物に熱心なもの、この学科の際立った特徴だ。

「とにかく考えることから逃げない。自分で考えて、自分でプレゼンテーションを

現代社会と若者たちを活性化する15のキーワード

自ら考え、自ら動く

大学には様々な学部があるが、文学部ほど誤解されている分野はないのではないかと。いわく、経済や法学などは社会でも役に立ちそうだが、小説をいくら読んでも道楽にしか見えない……。しかし、文学は言葉であり、言葉は思考の根源にはかならない。それが専修大学文学部の精神であり、広範に応用できる教養、つまりは究極の実学を目指している。全国でも類稀な「行動する文学部」を紹介する。

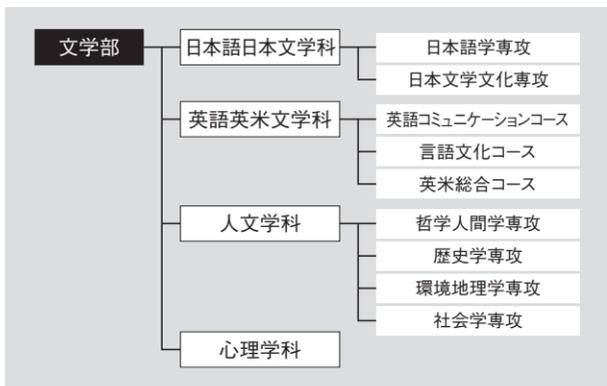


文学部長
矢野 建一

学科社会学専攻の大矢根淳教授は語る。

「例えば街で見かける自動販売機。最近では通行を妨げるものはなくなりまして。また、海外に行ってみるとほとんど見かけませんね。そこに見える自動販売機は人々の意識や行動、慣行や条例……と、様々な要因のたまもの。社会学ではそれらを各種「調査」で把握するのですが、この課程を一通り修めた学生には「社会調査士」の資格が授与されます。」

調査や検証はともかく、これはビジネスでも応用したい考え方である。その因



行い、自分で行動することを教えています（前出・板坂教授）

社会に発信 社会に還元する

専修大学文学部のもう一つの特徴は、社会への発信、社会還元を重視していることだ。「出前授業」はもちろん、社会人・高校教員・高校生などに対象を絞った多彩な公開講座は、すでに名物。



文学部 教授
板坂 則子

果関係の中から、効率化のヒントや新たな方向性も見えてくる。なるほど、と納得した人も多いはずだが、社会学専攻に限らず、こうした思考力を育成するのが専修大学文学部の基本的な目標なのである。

「約90人の教員が、ゼミナールを中心とした少人数教育を実施。1年次の入門ゼミに始まり、毎年どこかのゼミに所属することになります。大教室の講義ではなく、教員や学生たちがヒザを突き合せて議論することで、問題意識を高め、論理的思考力や感性を身につけていきます。その集大成として400字詰めで50枚の卒業論文を書いてもらいます。これが学生諸君の大きな自信につながるわけですね」（荒木敏夫前文学部長）

専修大学文学部は、日本語日文学科、英語英米文学科、人文学科、心理学の4学科6専攻3コースが設置されている。

4学科の中でも日本語日文学科は、いわゆる文学部の象徴的な存在だが、こちらも教室の中には留まらない「行動派」である。インターネットを通してベネチア大学など海外の大学と共同授業を行っているっており、テーマも「恋文」「ヒーローとヒロイン」「江戸時代の女性と読書」など興味深い。参加するのは日本文学研究の教授や学生なので、海外の学生も日本語が共通語である。こうした授業記録のCD・ROMを制作する作業にも



前文学部長
荒木 敏夫

Student Opinion 入学前のイメージと 入学後の印象がまるで違う大学です。



木村 薫さん
(日本語日文学科3年)

木村薫さんは、学生主体のグループ、ネット授業研究会のメンバー。文学部でインターネットを駆使するのは、専修大学ではもはや驚くことではないが、約3カ月をかけて日本文学文化専攻を面白く紹介したCD・ROMを制作した。タイトルは「日文学専攻2006」。興味のある人は大学に問い合わせいただきたい。

「何をどう紹介するかという企画の段階が一番悩みました。アイデアはいろいろ出たのですが、いかに楽しく伝えるかが難しかったです。取りあえず完成してホッとしているところです。国語が得意だったので、文学部に入学したのですが、専修大学には曖昧なイメージしかありませんでした。でも、入学してみると、これほど面白い大学はないと感じます。基本がゼミなので、先生との距離が近く、時には院生との交流もあって、楽しく勉強してきました。その一方で、文学部内なら他学科の授業も受けられるので、自分のやりたいことや知りたいたいことを追究できる幅の広さも魅力ですね。専修大学は古代から現代まで、各時代を専門とする先生がすべて揃っています。私は当然のことのように思っていたのですが、これはすごいことらしいですね。そろそろ卒業論文ですが、雨月物語をテーマにしようかなと考えています」

そのほかにも、前述した社会学専攻では、完成した調査レポートなどを情報提供者にも渡すことを徹底している。

争の記憶を風化させないためにも、社会に公開すべきだと考えたわけです」（矢野建一文学部長）

「歴史学専攻のゼミでは軍事郵便をテーマにしましたが、これをゼミだけに留めるのではなく、企画展を開催しました。メディアでも紹介されましたが、学生がどんな外に出て、遺族を見つけて、その遺族の方々から戦争当時の手紙をご提供いただきました。私信ですから、遺族と学生との間に信頼関係がなければ無理な話。にもかかわらず約1500通の追跡調査をしたのですから、その頑張りに頭が下がります。そして、あの戦

文学部では4学科の枠を超えて履修可能な「テーマ学習」も選択できる。アジア研究、ヨーロッパ研究、情報メディア研究、人間発達研究の四つだが、これらのゼミからも社会に還元すべき研究が続々と登場しそうです。

シカゴ大学のある教授は、すぐに通用する理論や知識は、すぐに古びてしまうと語ったが、専修大学の文学部はまさに「永続的な「究極の実学」を追究している」のである。